南琉球宮古伊良部語におけるコピュラ文の構造*

下地理則
東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

本稿の目的は，南琉球諸語に属する宮古伊良部語（以下，伊良部語）のコピュラ文の構造を記述することである．本稿で特に問題にする点は，コピュラに隣接する名詞句が述語に属するかどうかという点である．一般言語学的に見ると，伝統的に名詞述語（predicate nominal）という用語を使うことで，名詞句が述語に属すると想定されてきたようである．しかし Curnow (1999)や Dixon (2004)など比較的最近の類型論的な研究においては，この種の名詞句はコピュラ補語（Copula Complement; CC）であり，述語（コピュラ）に支配される項であると主張されることがある．本稿では，伊良部語のコピュラ文の記述を通して，この言語の場合はコピュラに隣接する名詞句が述語に属すると分析すべきであることを示す．

1. はじめに

本稿は，伊良部語のコピュラ文の構造を記述するとともに，コピュラ文の統語構造に関する類型論を再考することを目的とする．

通言語的に，コピュラ文は 2 つの名詞句とコピュラからなる構文であり，機能的には属性（proper inclusion）と等価（equation）を表わすことが典型的であるとされる（Schachter 1985, Hengeverd 1992, Payne 1997, Stassen 2003, Dixon 2004）．例えば以下の英語の例で，(1a)は属性を，(1b)は等価を表すコピュラ文である．

(1) a. *He is a teacher.*
b. *He is my father.*

コピュラの品詞分類は言語によって異なる．英語のようにコピュラが動詞である場合もあれば，(2)に見る Saramaccan 語のようにコピュラが他の品詞（例えば小辞）に属する場合もある．

* 本稿の執筆にあたって，言葉を教えてくださった伊良部島の方々に感謝申し上げる．また，お忙しい中ドラフトに目を通してくださった大西正幸先生（総合地球環境学研究所），風間伸次郎先生（東京外国語大学），柴崎礼士郎先生（沖縄国際大学），林由華さん（京都大学/学術振興会特別研究員），分析上の相談に乗ってくださった中山俊秀先生（アジア・アフリカ言語文化研究所），英語の例文を挙げて下さり，ネイティブチェックをしてくださった Daniel Long 先生（首都大学東京）にも深く感謝申し上げる．

(2) *hɛn* *da* *dÌ* *gaam*.
he COP the chief
'He's the chief.' (Saramaccan: McWhorter 1995: 349)

また，英語のようにコピュラを必須とする言語もあれば，以下の(3)に見る Watjarri 語のようにコピュラを欠く言語もある．非過去・肯定などの場合にコピュラを不要とし，過去や否定などの場合にコピュラを必要とする言語もある．本稿で扱う伊良部語はこのタイプである（2.1 節参照）.

(3) *pakarli* *maparnpa*.
man.ABS sorcerer.ABS
'The man is a sorcerer.' (Douglas 1981: 238)

言語個別的な語順の問題を考慮せず，いま典型的なコピュラ文を以下のように定式化してみよう．カッコ内のコピュラは言語ないし環境によっては不要であることを表す.

(4) NP1+NP2（+COP）
「NP1 は NP2（だ）」

ここで問題となるのは, NP2 の統語的な解釈である. これは述語に属するのだろうか？それとも，NP1 と同様に述語に支配される構成素なのだろうか？NP2 は伝統的には名詞述語（predicate nominal）と呼ばれることが多い（Schachter 1985: 55; Payne 1997: 114-115）. すなわち，NP2 が述語（の一部）として分析されることが多い.

この分析は，特にコピュラを欠く言語やコピュラが条件によって不要である言語の存在を考慮すればごく自然の分析のように見える．しかし，Curnow (1999)，Dixon and Aikhenvald (2000), Dixon (2004)など，コピュラ文に関する比較的最近の類型論では，コピュラ文は述語であるコピュラと 2 つの名詞句—コピュラ主語（Copula Subject; CS）とコピュラ補語（Copula Complement; CC）—を持つ構文とされることがある．すなわち，コピュラ補語（(4)における NP2）は主語項（NP1）と同様に，（述語の一部ではなく）述語によって支配される構成素（Dixon 2004 では'special core argument'）であると分析される.

本稿では，伊良部語のコピュラ文を詳細に記述することで，少なくともこの言語においては伝統的なコピュラ文の分析，すなわち NP2 が述語に属するという分析のほうが妥当であることを主張したい.

本稿の構成は以下のとおりである．まず 2 節において伊良部語のコピュラ文の一般特

徴を記述する．3 節で伊良部語のコピュラ文における述語が名詞句のほうであるという形態統語的な証拠を示す．4 節で結論を示す．

2. 伊良部語のコピュラ文

以下の(5)に示すように，伊良部語のコピュラ文はコピュラ（COP）とその直前の名詞句（NP2）の形態統語特徴によりほかの構文から明確に区別される．

(5) コピュラ文：NP1 + NP2 +(=FOC/TOP) (COP)

上の構造における(=FOC/TOP)は, NP2 とコピュラの間に焦点ないし主題標識が出現しうることを示している．主題標識=*a*（以下では名詞語幹末母音に同化した異形態=*u*）は否定の際義務的に出現する[1].

(6) *ba=ga* *butu=u* *aparagi-nisjai=du* *a-tar.*
1SG=GEN 夫=TOP 容姿のいい-青年=FOC COP-PST
NP1 NP2 =FOC COP
「私の夫は容姿のいい青年だった.」

(7) *nabjaara=a* *uku-munu=u* *ar-a-n=dooi.*
ヘチマ=TOP 大きい-DUM=TOP COP-THM-NEG.NPST=EMP
NP1 NP2 =TOP COP
「ヘチマは大きいものではない.」

以下，まずコピュラを記述し，続いてコピュラ動詞直前の名詞句（NP2）を記述する．

2.1. コピュラ

伊良部語のコピュラは動詞である．伊良部語の動詞は屈折するという特徴で他の品詞と明確に区別され, コピュラも屈折を行う（下地 2008）. コピュラ動詞語幹は *ar*-であり，他の動詞語幹と同じ屈折接辞を取る．以下の表 1 に，コピュラ動詞およびコピュラ動詞と同じ子音語幹動詞 *tur*-「取る」の定動詞屈折（肯定）のパラダイムを挙げる．

[1] よって，=*a* は主題標識ではなく，同音異義の別形態素（否定標識）であるという分析がより適切である（Shimoji 2008b）．本稿では主題標識としてグロスをふる．

表 1. 子音語幹動詞の定動詞屈折（屈折接辞に下線）

		tur-「取る」		*ar-*	
定動詞直説法	**過去**	*tur-tam*	「取った」	*a-tam*	「だった」
	非過去	*tur-m*	「取る」	*a-m*	「だ」
定動詞無標	**過去**	*tur-tar*	「取った」	*a-tar*	「だった」
	非過去	*tur-Ø*	「取る」	*ar-Ø*	「だ」
定動詞意志法	**非過去**	*tur-a-di*	「取ろう」	*ar-a-di*	「であろう」
定動詞希求法	**非過去**	*tur-a-baa*	「取りたい」	*ar-a-baa*	「でありたい」
定動詞命令法	**非過去**	*tur-i-Ø*	「取れ」	*ar-i-Ø*	「であれ」

伊良部語の動詞屈折は定動詞屈折と準動詞屈折（副動詞の屈折）の 2 種類があり，表 1 では定動詞屈折のみを挙げてある．定動詞は①テンス，②ムード，③肯否で屈折し，準動詞は①②で屈折せず，一部③で屈折する．屈折接辞は子音語幹か母音語幹かによって異なる場合がある．表 1 に示されているように，子音語幹動詞の場合，屈折接辞の種類によって語幹末に主題母音（thematic vowel，語幹拡張辞）が現れる（e.g. *tur-a-di* における*-a*）．

コピュラ動詞はいくつかの形態特徴で容易にほかの動詞と区別できる．以下，コピュラ動詞と語源を同じくする存在動詞語幹 *ar-*「ある」を例に，コピュラ動詞と非コピュラ動詞の違いを見てみよう．これら 2 つは以下の 3 つの点で明確に区別できる．

表 2. コピュラ動詞と存在動詞の区別

	コピュラ動詞 *ar-*	非コピュラ動詞：存在動詞 *ar-*
屈折による否定	+	-
特殊な異形態	+	-
条件により省略	+	-

まず否定の方法に関して，(8)に見るようにコピュラ動詞は動詞の否定屈折接辞によって否定されるが，(9)に見るように存在動詞は別の語幹 *njaa-*を用いて補充法によって否定される．

(8) a. *uri=a* *kagi-budur=du* *a-tar.*
それ=TOP きれい-おどり=FOC COP-PST
「それはきれいな踊りだった.」

b. *uri=a* *kagi-budur=ra* *ar-a-ttar.*
それ=TOP きれい-おどり=TOP COP-THM-NEG.PST
「それはきれいな踊りではなかった.」

(9) a. *macïnaka=n* *pai=nu=du* *a-tar.*
下地島=DAT 畑=NOM=FOC ある-PST
「下地島に畑があった.」
b. *macïnaka=n* *pai=ja* *njaa-ttar.*
下地島=DAT 畑=TOP ない-NEG.PST
「下地島に畑はなかった.」

特殊な異形態に関して，コピュラ動詞語幹は異形態 *jar-*を持つが，存在動詞にそのような異形態はない. *jar-*は一部の従属節において，または主節で非過去かつ直前の名詞句が焦点化される場合に現れる.

(10) *ujaki-pžtu* *ja-tigaa,* *nau=ju=mai* *ka-ai=du* *sï-Ø.*
金持ち-人 COP-たら 何=ACC=も 買う-可能=FOC する-NPST
「金持ちだったら，何でも買える.」
(11) *kari=a* *buuciri* *jar-Ø=ruga=du,* *cïmu-kagi-munu=dooi.*
3SG=TOP わんぱく COP-NPST=が=FOC 心-きれい-DUM=よ
「あいつはわんぱくだが，心のきれいなやつだよ.」
(12) *kari=a* *giin=gami=du* *jar-Ø.*
3SG=TOP 議員=EMP=FOC COP-NPST
「あの人は議員なんだよ！」

一方存在動詞は上記 3 つの環境において常に *ar-*である.

(13) *zin=nu* *a-tigaa,* *nau=ju=mai* *ka-ai=du* *sï-Ø.*
金=NOM ある-CVB.CND 何=を=も 買う-POT=FOC する-NPST
「金があったら，何でも買える.」
(14) *kabžž=ža* *ar-Ø=ruga=du,* *sïm=ma* *njaa-n.*
紙=TOP ある-NPST=が=FOC 墨=TOP ない-NPST
「紙はあるが，墨はない.」
(15) *jukaran* *kutu=gami=du* *ar-Ø.*
よくない こと=EMP=FOC ある-NPST
「よくないことがあるよ！」

最後に，動詞の出現に関して，コピュラ動詞は以下の条件のうちいずれかが満たされていれば必ず出現するが，すべて満たさない場合は出現しない．存在動詞は，条件に関

わらず常に出現する.

(16) a. 過去テンス
b. 否定
c. 従属節
d. 直前の名詞句の焦点化

以下の(17)はコピュラ文である．非過去テンスであり，肯定であり，主節であり，かつ直前の名詞句が焦点化されていないのでコピュラ動詞が出現していない.

(17) *kari=a* *irav-pžtu.*
3SG=TOP 伊良部-人
「彼（女）は伊良部の人（だ）.」

以下の(18)は，(17)の文末の名詞句を焦点化した場合であり，コピュラが必須となる.

(18) *kari=a* *irav-pžtu=du* *jar-Ø.*
3SG=TOP 伊良部-人=FOC COP-NPST
「彼（女）は伊良部の人だ.」

一方，以下の(19)は存在動詞文であり，どのような条件下でも動詞を省略することはできない．以下では(17)同様，非過去・肯定・主節で，かつ存在動詞直前の名詞句（主語）が焦点化されていない.

(19) *pataki=a* *ar-Ø.*
畑=TOP ある-NPST
「畑はある.」

2.2. コピュラ文における名詞句

典型的なコピュラ文では，まず主語名詞句があり，そしてコピュラ動詞直前の名詞句がある（典型的でないコピュラ文については 3.4 節で後述）．伊良部語ではコピュラ文において主語が特別な格形を取ることはなく，通常の自動詞・他動詞文と同様に主格で標示されるか，または格標示なしで主題標識のみで標示される．よって，主語名詞句の形態統語特徴によってコピュラ文かどうかを判断することは出来ない.

(20) *kantja=a* *dusï* *a-tar=ca.*
3PL=TOP 友達 COP-PST=だとさ
NP1 NP2 COP
「彼らは友達だったそうだ.」【コピュラ文】

(21) *kantja=a* *im=kai* *ifi-tar=ca.*
3PL=TOP 海=ALL 行く-PST=だとさ
「彼らは海に行ったそうだ.」【コピュラ文ではない自動詞文】

(22) *kantja=a* *junaitama=u* *kurusï-tar=ca.*
3PL=TOP 人魚=ACC 殺す-PST=HS
「彼らは人魚を殺したそうだ.」【コピュラ文ではない他動詞文】

一方，コピュラ文におけるコピュラ動詞直前の名詞句は決して格を取らず，この名詞句とコピュラ動詞を隔てるものは焦点や主題標識のみである．このように，コピュラ文におけるコピュラ動詞直前の名詞句は特徴的であり，ある文がコピュラ文かどうかを知る指標となる．

3. コピュラ文における述語の構造

本節では，以下に示す 4 つの形態統語特徴をもとに，伊良部語のコピュラ文におけるコピュラ直前の名詞句が述語に属するという分析を提示する．

(23) a. 格表示における振る舞い：コピュラ直前の名詞句は格表示されない．
b. 関係節化における振る舞い：コピュラ直前の名詞句は関係節化できない．
c. 焦点化における振る舞い：コピュラは述語焦点化不可能である．
d. 他動性のコントロール：コピュラ直前の名詞句は目的語を要求しうる．

以下それぞれの節で見ていくように，(23a-b)はコピュラ直前の名詞句が述語に支配されている項とは異なることを示し，(23c)はコピュラが単独で述語として機能していないことを示す証拠として使える．これらから，コピュラ直前の名詞句が述語に属するとしたほうが最も妥当であることが分かる．さらに，(23d)はコピュラ直前の名詞句が述語として機能していることを積極的に示す証拠である．

3.1. 格表示における振る舞い

2.2 節で見たように，コピュラ直前の名詞句はいかなる場合でも格表示されない．伊良部語では，格標識の省略および主語の主題化を除き，述語に支配される項は格表示される．よって，伊良部語のコピュラ直前の名詞句は述語の必須項（special core argument:

Dixon 2004）ではなく，述語に支配されていないと分析するのが最も妥当である．

3.2. 関係節化における振る舞い

伊良部語では，ある節の関係節化において，基底の項（必須項および任意項）を関係節によって修飾される名詞に転換できる[2]．例えば，以下の例で，(24a)を関係節化して(24b)を作り，基底の主語名詞句（下線部）を修飾することが出来る．

(24) a. *kanu mama-anna=a* *tuurguu=nkai=du* *uti-tar.*
その 継-母=TOP 通り池=ALL=FOC 落ちる-PST
「その継母は，通り池に落ちた．」

b. *tuurguu=nkai* *uti-tar* *kanu mama-anna*
通り池=ALL 落ちる-PST その 継-母
「通り池に落ちたその継母」

いわゆる Keenan-Comrie の関係節化の階層（Keenan and Comrie 1977）を適用すれば，伊良部語では階層上の全ての名詞句（主語＞直接目的語＞間接目的語＞所有者名詞句）に関して関係節化が可能である（Shimoji 2008b）．さらに，関係節化は階層上の名詞句以外にまで適用可能である．例えば以下の例で，下線部の名詞句を関係節内（角括弧内）に戻して，階層上のいずれかの役割を担う名詞句として復元することは出来ない．

(25) *[naa=ga* *ffa=nu* *ssagi* *asï-Ø]* *pukaras-sa=i.*
RFL=GEN 子=NOM 結婚式 する-NPST うれしい-NLZ=ね
「自分の子が結婚式（を）するうれしさ（だ）ね．」

このように，伊良部語の関係節化は通言語的にも自由度が高いが，節内の名詞句のうちコピュラ直前の名詞句だけは関係節化が出来ない．英語では *he is the great linguist* という基底の節から *I respect him for the great linguist that he is*「偉大な言語学者として彼を尊敬している．」という関係節（を伴う文）を作ることができるが，伊良部語でこのような関係節化は不可能である[3]．言い換えれば，英語ではコピュラ直後の名詞句 *the great linguist* が Dixon (2004)のいう Copula Complement として，すなわち述語に支配される名詞句として関係節化の対象になるが，伊良部語では，コピュラ直前の名詞句が述語に属しており，そのために関係節化できないと見たほうがよいだろう．

---

[2] ここでは単文のみを考慮している．複文における関係節化には制限があるが，それについては Shimoji (2008b)を参照されたい．
[3] この英文のネイティブチェックは首都大学東京の Daniel Long 准教授にお願いした．

3.3. 焦点化における振る舞い

伊良部語には述語焦点という特別な焦点標示法がある（Shimoji 2008a, b）．非コピュラ文の場合，述語焦点化は述語動詞を語幹と屈折接辞に分離し，動詞語幹を焦点標示したうえで，動詞の屈折接辞が軽動詞 *sï-*「する」に接続する．以下の(26)では，存在動詞 *ar* の焦点化の例である．

(26) a. *manzjuu=nu* *a-tar.*
パパイヤ=NOM ある-PST
「パパイヤがあった.」

b. *manzjuu=ja* *ar=du* *sï-tar.*
パパイヤ=TOP ある=FOC LV-PST
「パパイヤは（確かに）あった.」（lit. 「パパイヤはありぞした.」）

次にコピュラ文の焦点化を見てみよう．もし述語がコピュラ動詞だけで構成されていれば, (27b)のようにコピュラ動詞語幹が焦点標示され, 軽動詞が屈折を担うはずである．しかし，(27b)のような例は非文とされる．

(27) a. *uri=a* *sinsii* *a-tar.*
3SG=TOP 先生 COP-PST
「彼は先生だった.」

*b. *uri=a* *sinsii* *ar=du* *sï-tar.*
3SG=TOP 先生 COP=FOC LV-PST

以上のように, コピュラ動詞をターゲットとした述語焦点化が不可能であることから, 少なくともこの形態統語操作においてはコピュラ動詞が単独で述語として扱われていないことが分かる．一方，コピュラ直前の名詞句を焦点化することは可能である．

(28) *uri=a* *sinsii=du* *a-tar.*
3SG=TOP 先生=FOC COP-PST
「彼は先生だった.」

sinsii を述語と考えれば，(28)が述語焦点化であると言える．コピュラ動詞を動詞述語焦点化における軽動詞相当と考えれば，コピュラ文における述語焦点化と(26b)の動詞の述語焦点化とがパラレルな構造を有していることが分かる．

(29) 述語焦点化における述語の構造

動詞語幹=FOC	LV-INFLECTION
名詞句=FOC	COP-INFLECTION

3.4. 他動コピュラ文

伊良部語のコピュラ文の興味深い点は，以下の(30)に見るような他動コピュラ文が存在する点である[4].

(30) *ba=a* *miz=zu=baa* *num-busï-munu=du* *a-tar.*
1SG=TOP 水=ACC=TOP 飲む-DES-DUM=FOC COP-PST
「私は水を飲みたかった.」

(30)において，*num-busï-munu* は複合名詞である[5]．動詞語幹 *num-*「飲む」に，形容詞語幹化する派生接辞*-busï*「したい」(「ほしい」が起源）が加わって形容詞語幹 *num-busï-*「飲みたい」（拘束形式）を形成し，これが形式名詞 *munu*「もの」と複合して複合名詞 *num-busï-munu*「飲みたい（もの)」を形成している．*-busï* による派生およびその派生語幹と *munu* との複合は生産的である（例えば *asï-busï-munu*「したい」，*žž-busï-munu*「叱りたい」など)．(30)の和訳に示したように，*munu* は「もの」という語彙的な意味がほとんど，あるいはまったく感じられない．すなわち，形態論的な主要部である *munu* は意味的な主要部ではなく，ミスマッチが生じている．興味深い点は，*munu* が形態論的な主要部として振る舞うために *numbusïmunu* 全体が複合名詞として振る舞うことであり，これによって，動詞のように他動性を残しつつコピュラを要求する他動コピュラ文が生じていると言える．この複合形式が名詞として分類できることは 3.4.2 節で詳述する．

(30)から明らかなように，文全体の他動性を決定づけているのはコピュラ直前の名詞 *numbusïmunu*（に含まれる動詞語根 *num-*）である．ここで問題となるのは，この文の統語構造である．以下で明らかにしていくように，目的語 *miz*「水」は主節に属しており，たとえばこの名詞句が後続の *num-*に抱合されて形態論的に自立していない，というような分析は出来ない．よって，(30)は 2 項を要求する他動文である．*numbusïmunu* は主節の項（主語と目的語）を要求する述語として機能していると考えなければならない．も

---

[4] 英語で言うならば‘transitive copula construction’とでも言える構文である．コピュラ動詞に他動性があると主張しているのではないので，「他動『詞』コピュラ文」という言い方を避けている．

[5] *num-busï-munu* が複合語として 1 語をなしていることは以下の点から明確にわかる．まず，上に述べたように *num-busï* は拘束形式であり，*munu* の接続によって自立する．さらに，*num-busï-munu* に見られる 2 つの形態素境界に語を挿入することはできない（複合と句の区別の基準についてさらに詳しく論じている Shimoji 2008a, b を参照)．

しこの名詞句を述語（コピュラ動詞）に支配される構成素（Dixon 2004 などにおける Copula Complement）と考えると，述語に支配される構成素（*numbusïmunu*）がさらに独自の項（*mizï*）を要求するという構造を想定しなければならない．節は階層構造（layered structure）をなしているため，ある節レベルで構成素として働く埋め込み節（たとえば名詞節）が，埋め込み節内部で独自の項を要求することはある．しかし，同じレベルの節内（例えば主節）では，述語とそれによって支配される項という関係がみられるのであり，項同士に支配関係はみられない．伊良語の他動コピュラ文の場合，(30)の *numbusïmunu* と目的語名詞句 *miz* はともに主節に属するのだから，もし *numbusïmunu* が述語に支配される項であるのならば，同じレベルの節内（主節）で構成素同士に支配関係がみられることになる．よって，*numbusïmunu* は構成素を支配する側，すなわち述語に属すると見たほうが適切であるというのが本稿の分析である．

本稿で主張する他動コピュラ文の分析を正当化するにはいくつかの手続きが必要である．まずこの文がコピュラ文であることを示す必要がある．そのために，文末の動詞がコピュラであることと，*numbusïmunu* が名詞であることを示す必要がある．さらに，目的語名詞句が確実に主節に支配されている点も示す必要がある．以下，3.4.1 節から 3.4.3 節においてこれらについて詳しく論じる．

3.4.1. コピュラ動詞

本稿で他動コピュラ文だと分析する(30)のような文の，文末の動詞はコピュラ動詞である．この動詞は 2.1 節で述べたコピュラ動詞のすべての特徴を満たす．すなわち，屈折接辞によって否定され（(31)参照），特殊な異形態 *jar-*を持ち（(32)参照），非過去・肯定・主節・非焦点のすべての条件を満たすときには出現しない（(33)参照）．

(31) *ba=a* *miz=zu=baa* *num-busï-munu=u* *ar-a-ttar.*
1SG=TOP 水=ACC=TOP 飲む-DES-DUM=TOP COP-THM-NEG.PST
「私は水を飲みたくなかった．」【屈折による否定】

(32) *miz=zu=baa* *num-busï-munu* *jar-Ø=ruga,* *cjaban=nu=du* *njaa-n.*
水=ACC=TOP 飲む-DES-DUM=FOC COP-PST=が 茶碗=NOM=FOC ない-NPST
「水を飲みたいが，茶碗がない．」【異形態 *jar-*】

(33) *ba=a* *miz=zu=baa* *num-busï-munu.*
1SG=TOP 水=ACC=TOP 飲む-DES-DUM
「私は水を飲みたい．」【非過去・肯定・主節・非焦点化で省略】

3.4.2. コピュラ直前の名詞句

num-busï-munu が名詞であることは以下の 2 つのテストで確かめられる．Shimoji (2008a,

b)で提案した品詞分類では，伊良部語の名詞は，統語的には名詞句の主要部となるという特徴で同定され，名詞句は項となる構成素およびコピュラを取る構成素であると別個に定義されている．*numbusïmunu* はコピュラを取っている時点で名詞句の主要部としての必要条件を満たしているが，以下に見るように項としても使われるため，名詞として同定可能である．

(34) *num-busï-munu=nu=du* *ar-Ø.*
飲む-DES-DUM=NOM=FOC ある-NPST
「飲みたいものがある.」

項として機能する場合は，上の例のように *munu* の「もの」という意味が保たれている．つまり *munu* は，複合名詞の統語機能によって語彙的な意味が左右される．

numbusïmunu は名詞句の主要部であるから，名詞句の修飾部に立つ連体詞による修飾が可能である．以下の(35)の *numbusïmunu* は，(36)の *pžtu*「人」のような典型的な普通名詞のように連体詞による修飾を受けている．ただし，(35)の連体詞を和訳すれば程度副詞をあてるのが自然である．

(35) *ba=a* *miz=zu=baa* *daizïna* *num-busï-munu=du* *a-tar.*
1SG=TOP 水=ACC=TOP たいへんな 飲む-DES-DUM=FOC COP-PST
[MODIFIER HEAD]$_{NP}$
「私は水をとても飲みたかった.」

(36) *kari=a* *daizïna* *pžtu=du* *a-tar.*
3SG=TOP たいへんな 人=FOC COP-PST
[MODIFIER HEAD]$_{NP}$
「彼はたいへんな人だった.」

伊良部語の名詞は屈折しないために，名詞であれば必ず要求される形態論的な特徴はない．よって，名詞の同定において形態論的特徴は二次的であるが，*num-busï-munu* が名詞であると判断できる証拠がある．以下の例に見るように，*num-busï-munu* は名詞の派生接辞である*-gama*（指小辞）を取ることができる．この際，指小辞は意味的には「ちょっと」という程度副詞的な意味を表わす．

(37) *ba=a* *miz=zu=baa* *num-busï-munu-gama=du* *a-tar.*
1SG=TOP 水=ACC=TOP 飲む-DES-DUM-DIM=FOC COP-PST
「私は水をちょっと飲みたかった.」

以上, 形式名詞 *munu* を形態論的な主要部とする複合形式が名詞であることを示した．しかし，これはあくまで名詞という品詞を「NP の主要部に立つ語」という基準で同定した場合である．より詳細に分析すると，典型的な名詞とは大きくことなるという点も強調しておかなければならない．例えば，(35)の連体詞を副詞 *ati*「とても」で置き換えることができる．一方，(36)のような普通名詞を副詞修飾することは出来ない．また，談話における実際の使用に目を向けると，この複合形式のほとんどの例がコピュラ直前の名詞句として使われているという事実がある（Shimoji to appear）．本稿で示したように，この形式を名詞として同定するのが最もシンプルな方法であるが，実際には *munu* の referential な意味が薄れつつあり，本来項として使われることが典型である名詞としての性質を失い，副詞修飾といった動詞としての性質を獲得しつつあることが見てとれる．いずれにせよ，コピュラ直前のこの複合形式が述語として機能していることには変わりがない．

3.4.3. 目的語が主節に属しているか

以下の例（(30)の再掲）で，角括弧で示した目的語名詞句が主節に属していることを示す証拠が少なくとも 2 つ存在する．

(38) *ba=a* *[miz]=zu=baa* *num-busï-munu=du* *a-tar.*
1SG=TOP 水=ACC=TOP 飲む-DES-DUM=FOC COP-PST
「私は水を飲みたかった.」

その証拠を示す前に，以下の点を確認しておきたい．この名詞句とコピュラ直前の名詞句の間には他の語が挿入可能であり，この点でこれらは 2 語として分析可能である．よって，例えば *miz=zu=baa* が後続の *num-*「飲む」に抱合されていると考えることは出来ない．例えば(35)の例で見たように，目的語名詞句とコピュラ直前の名詞句の間に，後者を修飾する連体詞を挿入できる．

目的語名詞句が主節に属している最初の証拠は以下のようである．(38)において示されているように，この名詞句は主題標識=*baa* でマーク可能である．主題標識は主節の構成素だけをマークできるため（下地 2006, Shimoji 2008b），この名詞句が主節の構成素であることは明らかである．

次に，(38)を関係節化し，その目的語名詞句を関係節の外に出して修飾できる[6].

---

[6] ただし，語用論的により自然なのは，*num-busï-munu atar* を動詞 *num-busï-ka-tar*（飲む-DES-VLZ-PST）にした文である．拘束語幹 *num-busï-*「飲みたい」は形式名詞 *munu* と複合して名詞として自立することも，*-ka* によって動詞語幹化して動詞として屈折することも可能であるが，従属節内では後者が選ばれることが多い．これは，両形式が情報構造によって使

(39) *[ba=ga* *num-busï-munu* *a-tar]* *mizï*
1SG=NOM 飲む-DES-DUM COP-PST 水
「私が飲みたかった水」

関係節（角括弧内）は *mizï*（*miz* の形態音韻論的なバリアント）が基底レベルで属している節であるから，(38)において *miz* が主節に属していると言える．

以上の 2 つの特徴から，(38)における目的語名詞句は主節の構成素であると分析するのが適切である．この文は主語と目的語を持つ他動文であり，それを支配しているのは *numbusïmunu* である．よって，これを主節の述語であると分析したほうがよい．

3.5. まとめ

これまで見てきたように，伊良部語には，格表示における振る舞い・関係節化における振る舞い・述語焦点化における振る舞い・他動性のコントロールという 4 つの特徴から，①コピュラ動詞が単独で述語を形成しているとは考えられず，②コピュラ直前の名詞句が述語に属していると見ることが適切であることが分かった．コピュラ文の述語は，意味的な主要部である名詞句と，従属部であるコピュラ動詞からなると考えられる．

4. おわりに

本稿では，伊良部語のコピュラ文の構造を分析し，コピュラ直前の名詞句が述語に属することを示した．伊良部語のように，言語によってはコピュラ直前の名詞句がコピュラとともに述語を構成しており，必ずしも「コピュラ補語」（コピュラに支配される項）として分析することはできないと言える．

略号

ACC:	対格	FOC:	焦点	(N)PST:	（非）過去
ALL:	向格	GEN:	属格	PL:	複数
CAUS:	使役	HS:	伝聞	PROG:	進行相
COP:	コピュラ	INST:	道具格	Q:	疑問
CVB:	副動詞	INT:	意志	RFL:	再帰
DAT:	与格	LV:	軽動詞	SG:	単数
DES:	願望	NEG:	否定	THM:	主題母音（語幹拡張）
DIM:	指小辞	NLZ:	名詞化	TOP:	主題
DUM:	形式名詞 *munu*	NOM:	主格	VLZ:	動詞化

い分けられているからである．動詞形式を使うのは述語の表す情報が前提になっている場合である（近隣の平良語を扱っている Koloskova and Ohori 2008 を参照されたい）．

参考文献

Curnow, Timothy J. 1999. Towards a Cross-linguistic Typology of Copula Constructions. Proceedings of the 1999 Conference of the Australian Linguistic Society: 1-9.

Dixon, R.M.W. 2004. Adjective classes in typological perspective. In Dixon, R.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald, eds., *Adjective classes*, 1-49, Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald. 2000. Introduction. In Dixon, R.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald, eds., *Changing valency: case studies in transitivity*, 1-29, Cambridge: Cambridge University Press.

Douglas, Wilfrid H. 1981. Watjarri. In Dixon, R.M.W, and Barry J. Blake, eds., *Handbook of Australian Languages* (2), 196-272, Canberra: ANU Press.

Hengeveld, Kees. 1992. *Non-verbal predication: theory, typology, diachrony.* Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Koloskova, Yulia, and Toshio Ohori. 2008. Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language: a case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. *Studies in language* 32 (3): 610-636.

McWhorter, John. 1995. Looking into the void: Zero copula in the Creole mesolect. *American Speech* 70. 339-360.

Payne, Thomas E. 1997. *Describing morphosyntax.* Cambridge: Cambridge University Press.

Schachter, Paul. 1985. Parts-of-speech systems. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description* (1), 3-61, Cambridge: Cambridge University Press.

下地理則．2006.「南琉球語宮古伊良部島方言」中山俊秀・江畑冬生（編）『文法を描く 1』，85-117，東京：ILCAA.

下地理則．2008.「伊良部島方言の動詞屈折形態論」『琉球の方言』32: 69-114.

Shimoji, Michinori. 2008a. Descriptive units and categories in Irabu. *Shigen* 4: 21-57.

Shimoji, Michinori. 2008b. A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. A PhD thesis submitted to the Australian National University.

Shimoji, Michinori. to.appear. The adjective class in Irabu Ryukyuan.『日本語の研究』5 (7).

Stassen, Leon. 2003. *Intransitive predication.* Oxford: Oxford University Press.